竹の秋によせて

里山に「山が笑う」季節が訪れると、竹林ではたけのこが勢いよく伸び始め、ほぼ時を同じくして竹の葉が色づく「竹の秋」を迎えます。現在でこそその無秩序な拡大も懸念されている竹林ですが、かつては竹材・皮・枝やたけのこの販売などを通じて、農山村に貴重な現金収入をもたらす林産資源としてその増殖が奨励されていました。

市域の代表的な伝統工芸に鈴鹿の竹器があります。市域が属した旧有馬郡には有馬町（現神戸市）や山口村（現西宮市）といった大産地もありました。竹器は明治の中ごろから欧米向けの輸出が急速に拡大し、貴重な外貨収入源となりました。その結果、明治30年代頃からは竹林の経済的な価値が政策的にも注目されましたが、同40年代にハチクやマダケが相次いで開花していっせいに枯れはじめ、大きな打撃を受けてしまいました。その後はそれまでの粗放的な竹林経営に対する反省がなされ、有馬郡でも農会を中心として、竹林育成の研究が進められました。大正後半頃には町村単位で竹林組合が組織され、竹林の改良や竹材の計画的な伐採・販売などが奨励されました。

羽束川堤防の竹林(昭和50年代後半)

鈴鹿竹器もまた、輸出商品として大いに繁栄した経緯をもちます（市史第９巻民俗編参照）が、生産の起源は江戸時代以前にさかのぼります。現存最古の明治８（1875）年の「物産取調書」には、箱や籠で合計824円の産額が記録されており、米価から換算すると現在のおよそ600万円前後に相当します。このころはおそらく日常用具として近隣に販売されていたのでしょう。同書によると近接する田中村で180貫目（約675キログラム）分の「中竹」の産出が記載されており、これが竹器の材料として供給されたものと思われます。現在でも高平地区の田中区周辺では羽束川の堤防沿いに特徴ある竹林がみられます。もともとは堤防を補強する役割があったのではないかと思われますが、後にはその管理や伐採がひいてはわが国の外貨収入の一助ともなっていったのです。

総務課市史編さん担当